

音更町立駒場中学校

実施日：平成23年12月15日（木）13:20～14:10

講師：河田 弘登志氏（多楽島出身）

ご紹介いただきました、北方領土の多楽島（たらくとう）出身の河田です。歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島を北方領土と呼んでいます。あるいは北方四島とも言っています。私は歯舞群島の多楽島の出身ですが、皆さんどこにあるかわかりますか。歯舞群島には人の住んでいた島が五つあります。一番近いところは、無人島ですけれども根室ノサップ岬から3.7キロのところに、貝殻島という灯台のある小さな無人島があります。その中間点を超えると、ロシアに拿捕（だほ）されます。ノサップ岬から7キロの所に水晶島があって、ここには人が住んでいました。その右手の方に秋勇留島（あきゆりとう）、勇留島（ゆりとう）、志発島（しぼつとう）、そして、色丹島に近く、ノサップ岬から45キロくらいが一番離れたところにあるのが、私たちが住んでいた多楽島です。

歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島を合わせた面積は、5,036km²です。国後島の面積は1,499km²で、沖縄本島の面積が約1,200km²なので国後島は沖縄本島よりも大きいです。択捉島の面積は3,100km²以上あります。北方領土には、終戦当時約17,300人の日本人が住んでいました。歯舞群島の島を合わせると約100km²です。今、根室市に住んでいるので知ってもらいたいのですけれど、根室市の面積が歯舞群島の面積を含めて約520km²になります。そのうちの100km²がロシアによって不法に占拠されているわけですから、根室市の五分之一が占拠されています。

私は、昭和9年に多楽島で生まれました。祖父は明治時代に多楽島に入り、開拓してきました。それこそ、一本一本草木を取り払い、血と汗と涙で開拓してきた土地なのです。多楽島の学校には、小学校1年生から今の中学2年生までの高等科を合わせて240人の生徒が通っていました。私は、太平洋戦争が始まった昭和16年に国民学校に入学しました。

北方領土の海域は世界の三大漁場の一つと言われています。今でも多くの漁業資源があります。このような恵まれた環境の中で90%の人が漁業や水産加工に従事していました。特に、歯舞群島は昆布漁が盛んでした。5月から11月の初め頃までは昆布漁の時期ですから、皆さんのような中学生は大人と一緒にですから、大人と一緒に昆布取りをしていました。私たちも、小学校に入る前から家族総出で仕事をするわけですから、学校に行っていない子供のやる仕事、学年に応じてやる仕事が決まっていて、夜の2時、3時から大人と一緒に仕事をして、晴れの日には小さい子供も昆布を干しを手伝いました。最盛期には、大人達は一生懸命仕事をしていました。11月から3月までは仕事がなかったので、島の人達が集まっているいろいろな催しを行っていました。青年団の人達は、集会所がなかったので、順番で家に集まり、そろばんをやったり、人の前で話をしたりしました。

太平洋戦争が始まって、だんだん戦局が厳しくなって、私たちが島から出なければならなくなったことをお話ししたいと思います。昭和20年8月15日に終戦になりましたけれども、当時、日本が戦争に負けるなんて誰も考えていませんでした。しかしながら、時間が経つにつれて、こうしてはられない、これからも一生懸命仕事をしようと言っていた矢先に、ソ連軍の上陸が始まりました。ソ連軍が入ってくるとは誰も予想していませんでした。8月28日に択捉島にソ連軍が上陸しました。9月1日に国後島、その後色丹島、歯舞群島に上陸してきて9月5日までにすべての北方領土を占拠しました。私の島のソ連軍の上陸については、人によって話が違います。9月2日という人もいます。当時、多楽島にも日本の兵隊がおり、隊長の手記によると、

9月4日に銃の返納式をする予定だったのですが、ソ連軍が上陸してきたので偵察を出したところ、上陸してきたソ連軍と途中で出くわし、捕虜になったということです。ソ連軍の隊長が馬にまたがって私の家の前を通って行きました。その隊長の姿を今でも思い出します。その後、銃を持ったソ連兵が二人一組になって土足で家の中に入ってきました。新築して一週間くらいしか経っていない家に土足で入ってきたので、本当にびっくりしました。ソ連兵は銃で天井などを突いて、アメリカの兵隊はいないか、日本の兵隊をかくまっていないかを聞いてました。そのようなことがないことが分かると、今度は私物を欲しがりました。腕時計です。当時はそんなに腕時計をしている人がいるわけではないので、家にはありません。それから、酒はないかと言いました。私の家で持って行かれたのは、バリカンやカミソリなどです。島では、ソ連軍が上陸してきたときに、この島には若い女性がないという事にしていました。女性は変装して物置や馬小屋などに隠しました。やがて時間が経って、ソ連軍が暴行を加えないということが分かってから出てきました。私は、ソ連軍が来たときは、親の背中に隠れるようにして覗いていたのですが、時間が経ってから話もできるようになりました。9月の初めは漁の真っ最中なので、父親の船に乗せられて、夕方、イカ釣り漁に出たところたくさんの船がいて、出るときには明るくて何もなかったのですが、当時の船は、焼き玉エンジンと言って、ものすごい音がするので、その船が一齐に船が動き出したため、ソ連の兵隊から銃で撃たれました。当時、夜は外出できない。無線局はありましたけれども、ソ連軍に接收されて通信もできない。そのような状況にいと島では安心して暮らすことはできません。頼りの日本の兵隊は、ソ連軍の捕虜となってシベリアに送られて、何年も過ごすこととなります。ある時、夕方暗くなってから少しの荷物を船に積み込んで、発見されるのを避けるため沖まで手で漕いで行って、そこで、ようやくエンジンをかけて根室に向かいました。皆さんは分かると思うんですが、66年経っても帰って来ない人もいます。

島を離れた人は、大きく分けて一時避難的に自力で島を離れた人が約半数、強制送還が半数ということで、強制送還はどのようにして行ったかという、昭和20年9月6日に、突然、「今来ている船に乗って島を出なさい、そうしなければ一生帰れない」という話があり、身の回りの物を積んで島を出ました。ところが、その後志発島に寄ってそこで1ヶ月半過ごした後、ソ連の船に乗せられて樺太経由で函館に帰ってきました。船というと、皆さんは客船を想像するかもしれませんが、当時、ソ連軍にはそのようなものはありません。1万トンクラスの大きな貨物船に沖まで小舟で行って、編み目の大きなもっこに荷物と一緒に入れられ、ウインチで釣り上げられて大きな船の船倉の中に入れられました。私の父親は、入るところがなく10月で寒かったですけれども、我慢して甲板の上にいました。5、6時間したら根室の港に入れると思っていたら、樺太に連れて行かれて真岡（まおか）に1ヶ月半ほどいました。学校の屋体に畳2枚を引いて、そこに家族5人入れられました。食べるものもない、着るものもない、寝ることもできないという中で生活しました。やがて函館に帰ってきました。

戦後の暮らしはどんなふうだったのかというと、3月11日の東日本大震災で今だに大変な思いをしている人もおります。皆さんあの状況をご存じだと思いますが、私はあの状況を見て当時を思い出しました。私たちも、66年前に同じような経験をしました。入る家もなく、掘っ立て小屋の下に引く板がないので、筵を引いていると、冬にはまわりからどんどん凍ってくるんです。そのような中で生活をしてきましたので、被災者の状況を気の毒だと思っております。帯広、十勝管内にも私たちの仲間がおりますけれども、なんとか生活できるようにするためには、10年以上かかりました。

北方領土は日本固有の領土です。北方領土問題というのは、元島民や北海道だけの問題ではありません。1億3千万人、皆の問題なのです。今どういう状況に置かれているかということ、日本の領土であるにも関わらず不法占拠されているということで、国家の尊厳に関わる問題なのです。

私たちは返還要求運動をやっているんですけれども、返還要求運動はいつから始まったかということ、昭和2

0年に安藤石典（あんどういしすけ）という根室町長がいました。根室は終戦1月前に空襲で市街地の8割が焼け野原となり、大変な時期でした、そこに島からの引き揚げ者がどんどん入って来て、その人達の面倒も見なければならぬ。そんな時期に安藤石典が北方領土返還要求運動の第一声を上げました。当時の連合国のマッカーサー元帥に対して、「北方領土は日本固有の領土である。ソ連に不法に占拠される謂われはない。連合国の占領下に置いて欲しい。」という陳情をしたのが今に繋がる返還運動なのです。それを引き継いで今に至っています。先程、教頭先生とも話したのですが、一番いいのは皆さんに島を見てもらうことなんです。「百聞は一見にしかず」ということわざがありますが、距離的なことがあってなかなか大変なんですけれども、機会があれば是非見ていただきたいと思います。去年のことなんです、新聞やテレビで賑わしましたが、11月1日にメドヴェージェフ大統領が国後島に入りました。あの時、私たちは何ともいたたまれない気持ちになりました。嵐の中をノサップ岬に緊急に集まりまして、抗議集会を開きました。

私たちは色々な方法で返還運動をやっていますし、今のうちに一人でも多くの人に当時のことを話さなければならぬという気持ちでやっていますが、世代も変わりますし、66年経って、当時の小学校5年生が80才に近づいてきています。今のうちに一人でも多くの人に私たちの話を聞いていただいて、皆さん方が聞いた話を言い伝えていっていただければ大変有り難いと思っています。



清水町立御影中学校

実施日：平成 24 年 2 月 14 日（火）13:20～14:10

講 師：河田 弘登志氏（多楽島出身）

ご紹介いただきました河田弘登志と言います。皆さんに覚えていただきたいのは、北方領土、北方四島とも言いますが、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島を北方領土と言ってます。私の出身は先生からご紹介ありました、歯舞群島の多楽島（たらくとう）なんですけれども、歯舞群島の中には、人の住んでいた島が五つあります。根室ノサップ岬から7キロのところの水晶島、その右側に秋勇留島（あきゆりとう）、水晶島の後ろに勇留島（ゆりとう）、少し離れたところに歯舞群島で一番大きな島の志発島（しぼつとう）があります。そして、色丹島に近く、根室ノサップ岬から45キロのところ私が住んでいた多楽島があります。北方領土の総体の面積は5,036㎢ですから、歯舞群島合わせて100㎢で、多楽島は12㎢しかありません。

当時、北方領土には約17,300人が住んでいましたが、歯舞群島には約5,300人が住んでいました。そのうち多楽島には、約1,450人が住んでおりました。北方領土には39の学校があり、多楽島の学校には、小学1年生から今の中学2年生までの高等科があり、240人が通っていました。北方領土にある39の学校の中で一番生徒数の多い学校でした。他の島の人と話していると、多楽島は小さくて、平たいので煎餅島と呼ばれることもありましたが、人口密度は北方領土の中で一番高くて、生徒数の一番多い学校だったということ自慢していました。

現在、北方領土はロシアに不法に占拠されておりすけれども、歯舞群島の100㎢は根室市の面積の中に入っているんです。根室市の面積は、歯舞群島の100㎢を加えて520㎢なんです。ですから、根室市の面積の五分の一がロシアに占領されているということ覚えておいていただきたいと思います。

多楽島は木も生えていないような島ですけれども、春になると野山には花が咲き、5月になってヒバリが飛びよくなると、学校の行き帰りに、ヒバリがどこに巣を作っているか探しながら歩くと、降りたところに巣を見つけることができます。卵がひよこになって、やがて大きくなって飛び立っていくのを見るのが楽しみだったんです。ヒバリだけではなくて色々な鳥がいます。他の野生動物はいないんです。海にはアザラシは毎日見ますし、今頃はトドとか夏には鯨を見ることができます。鯨が迷って陸に上がったことも何回もあります。

北方領土ではどのような仕事をして生活していたのかというと、北方領土周辺は世界の三大漁場の一つと言われるほど漁業資源が豊富です。多楽島だけではなくて、それぞれの島で色々な魚が獲れるわけですから、90%の人は漁業や水産加工などに従事しておりました。歯舞群島では、多くは昆布を採っていました。シーズンには定住している人以外に、富山県などから、春になるとやってきて秋に帰って行くというようなことを繰り返している人もいました。期間は半年くらいなので、皆さんぐらいの年齢になると戦力です。大人と一緒に船に乗って沖に行き昆布採りをやっています。小学校1年生でもやる仕事があるんです。2年生、3年生と学年が進んでくると、親と一緒に仕事をしました。そして朝2時、3時に起きて昆布を干す手伝いをして、それが終わったらご飯を食べて学校に走って行き、学校が終わると走って帰ってきて、干してある昆布を納屋にしまうなどの手伝いをしながら生活しておりました。戦時中であっても空襲を受けるわけではないし、敵の軍隊が来るわけでもありません。

昭和20年8月15日、日本は終戦を迎えました。その時も私の父親は沖に行き昆布を採っていました。今のように通信手段がありませんから、帰ってくるまではわかりませんでした。帰ってくるなり、私の父は、

浜に座り込んでしまいました。本当にがっかりしたんですね。時間が経つにつれ、こうしてはいられない一生懸命頑張ろうと思っていた矢先に、ソ連軍が入って来ました。ソ連軍は8月28日に択捉島、9月に入って国後島、色丹島、9月5日までに歯舞群島を含む北方領土が占領されてしまいました。多楽島にソ連軍が上陸した日については諸説ありますが、当時は今のようにカレンダーなどない時代ですから、記憶に頼るしかありません。日本軍の隊長が書いた手記では、9月4日に兵隊の使っている武器を天皇陛下にお返しする返納式をやっている、そこにソ連軍上陸の情報が入ったため、下士官に命じて偵察を出しました。下士官は隣の家の馬に乗って北の方に偵察に行ったんですが、そこに上陸してきたソ連軍と鉢合わせをして捕虜になったそうです。ソ連の兵隊が馬に乗って家の前を通り過ぎていったのを今でも覚えています。その後、ソ連の兵隊が二人一組になって一軒一軒土足で家に入ってきました。新築して一週間くらいしか経っていなかった私の家に銃を構え土足で入って来て、アメリカ軍がいるかないか、日本の兵隊をかくまっていないか、銃を隠し持っていないかについて聞いてきました。私は小学校5年生で、五人兄弟の一番上だったのですけれども、親の背中に隠れながら見ておりました。やがてそういうものがないことが分ると、今度は私物を欲しがりました。何を欲しがったかという、腕時計を欲しがりました。当時、腕時計をしている人はそんなにいなかったですから、家にもありませんでした。今度は引き出しを空けて家捜しを始めバリカンとカミソリを持って行かれました。また、酒はないかということで、母親は甘酒を造っていて、甘いときには子供達が飲んで、発酵が進むとお酒になるので、その酒瓶を戸棚の下に置いていたのですが、ソ連兵に見つかりました。やがて慣れてきたら二人の兵隊が、一見穏やかそうだったのですが、一番心配したのは若い女性です。何をされるか分からないということで、顔に墨を塗ったり、男装させたりして、物置や山の中などに隠したんです。この島には若い女性はいないということにしたんです。大丈夫だということになってから出てきました。もう一つは、外出は禁止、根室との通信はすべて切られてしまい、全く情報は入りませんでした。ある時、夕方父親の船に乗せられてイカ漁に出かけたんですが、出るときは明るくて何事もなかったんですが、夜中に漁が終わって、当時の焼き玉エンジンで一齐に船を動かしてももの凄い音を立てて帰ってくると、ソ連軍が威嚇で撃ってきました。このような事が続くと安心して生活ができないので、エンジン付きの船を持っているところに乗り合わせて夜陰に乗じて、波が穏やかな時間を狙って身の回りのものを少しだけ積んでこっそり抜け出しました。私の家には船がありましたから、最短距離で5、6時間で根室の港に入れましたが、ソ連軍に見つからないように迂回をしましたから通常の2倍から3倍の時間がかかりました。積み荷が荷崩れを起こして、荷物を捨ててようやく助けられた人はたくさんおりましたけれども、66年、67年経っても未だに着いていない人もいます。そんな風にして、歯舞群島、色丹島、国後島の北海道に近い人が小舟で脱出しました。残った人はどうなったかという、ソ連の監視が厳しくなって出られませんでした。昭和22年、昭和23年にかけて、強制送還されました。船に乗り込む人は、身の回りの物を少し持ってソ連の船に乗せられました。船というと、客船を想像するかもしれませんが、そのような船はなくて、1万トンクラスの大きな貨物船です。貨物船ですから、特に、トイレはついていません。その中に荷物同然の扱いで大きな編み目のモッコに荷物と一緒に入れられて、ウインチでつり下げられて船倉に入れられました。私の父親もよく言うんですが、船倉に入れず甲板にいて5、6時間もすれば根室に着くだろうと思っていたら、星を見ると北へ北へと進んでいて、樺太の真岡（まおか）に連れて行かれました。家を出てから3ヶ月かかってようやく函館に着きました。このようにして強制送還は行われました。多くの方は根室を目指しました。ところが、根室の町は終戦の1ヶ月前の空襲で市街地の80%が焼け野原となっており、根室に行った人達も入るところがない。何も無いところにどんどん入り込んで来た。皆さんと同じような頃どんな生活をしていたかという、私たちの入る家がなかったので、どうにかこうにか地面を掘って柱を立てて、薄い板で屋根を作って、掘って立て小屋を建てました。下に敷く板がないので、土の上に筵を敷いて生活しました。秋から冬にかけてどんどん周りが凍ってくるのです。朝起きると雪が入って来

ていて、がりがりに凍っていたり、煮えたぎっていた鉄瓶のお湯が氷が張っているというようなところで何年も生活してきました。去年3月の東日本大震災からもうすぐ1年になろうとしていますけれども、あれを見て思い出してしまいました。私たちは、まだまだひどい生活をしていました。私たちも経験をしていますので、気の毒だなあ、大変だなあと思っています。

どうにかこうにか、なんとか生活できるようになるまでに、10年以上かかっています。そして、1年に2回も3回も引っ越しです。行くところがなくて馬小屋にも入りました。馬が住んでいる仕切りのない所で食べて、寝起きてしていました。島から来た人達は皆、そういう生活をしていました。

戦後の大変な時に根室の町長をしていた安藤石典（あんどういしすけ）は、昭和20年12月1日に連合国のマッカーサー元帥に対して、「北方領土は日本固有の領土である。ソ連に占領される謂われはない。連合国の占領下に置いて欲しい」と陳情を行ったのが、今に繋がる北方領土返還要求の第一声なのです。私は、大変な時期にこのような行動をとられたことに、大変偉い人だなあと思っています。そして、毎年2月7日は「北方領土の日」ということで、昭和56年に国で定めて、全国の皆さんにPRして、全国至る所で2月7日を中心にして色んな行事をやっておりますけれども、「北方領土の日」が分かりませんという人がいます。非常に残念です。元島民であるとか、一地域であるとか、返還要求運動を一生懸命やっている人だけ、とかそういう問題ではないんです。1億3千万人一人一人の問題なんです。日本の主権と尊厳が損なわれる、日本の固有の領土であるということでも一生懸命やっているんですけど、私たちもこの運動に関わってから60数年経ってしまっているので、元島民の半分以上が亡くなり、平均年齢も78才になります。ですから私たちは、後継者を育てて後を引き継いでもらいたいと思って一生懸命やっているんですけど、なかなか思うようにいかないわけです。だから、私たちはこれからの時代を担っていく皆さん方に北方領土問題、北方領土を勉強してもらって、皆さんの時代で返還されなかったら次の時代に、ロシアに対して絶対に諦めないぞという我々日本人の意気込みを見せていかなければならないと思います。諦めてそのうちにやめるだろうというように感じられたのでは、見込みがなくなります。ですから、皆さん方に一生懸命勉強してもらって、やっていただきたい。そのためには、色んな方法があると思うんですけども、学校教育の中でやってもらっています。北海道ではやっていると思いますが、高校入試や大学入試に入れてもらい、小、中、高、大学と一貫してこの問題を勉強する。そして、就職試験に必ず北方領土問題が出るというような環境整備をすることが大事だと思います。

私たちは、皆さん方のような時代を担う人達に望みを託して、引き継いでいただきたいと思っていますので、宜しくお願いします。

